

ブルガリア短編集

イヴァン・ペリンのあやまち

襲いこみ《回想》

熊使い

あの世で

青

完全なる人間

スペイン・コレラ

グルートカ

毎日毎日

デルヴィシヨフの胤

ヨツオじいさんが見ている

ルナチーン／ルナチーン／ルナチーン／

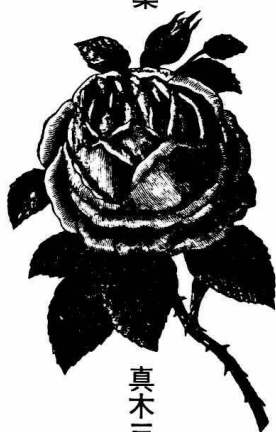


露に濡れた石橋

真木三三子 訳編

露に濡れた石橋

ブルガリア短編集



真木三三子 訳編

恒文社

■真木三三子■

略歴——1933年、甲府市に生まれる。

1955年、東京外国語大学ロシア語科卒業。1957年から1964年まで、東京外国語大学留学生科で日本語講師をつとめる。1967年より1973年まで、福島県立医科大学でロシア語を教える。以後、翻訳に従事。

翻訳『フリスト・ボテフ詩集』(恒文社)、ツルゲーネフ『初恋』(立風書房)、イヴァン・ヴァーゾフ 詩『こだま』(平凡社、世界名詩集大成)、その他。



露に濡れた石橋 (ブルガリア短編集) ©1977

1977年12月20日 第1版第1刷発行

訳 編 真 木 三 三 子
発 行 者 池 田 郁 雄

発 行 所 株式会社 恒 文 社
東京都千代田区神田錦町 3—3
振 替 口 座 (東京) 5-35824

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

印刷・鈴木製版 三成社

製本・飯塚製本

1097—005013—2273

ブルガリア短編集

露に濡れた石橋

目次

ヨフコフ ■ イヴァン・ペリンのあやまち 5

トドロフ ■ 熊使い 29

カラリイチエフ ■ 露に濡れた石橋 43

ペリン ■ あの世で 59

アブリロフ ■ 青 73

コンスタンチノフ ■ 毎日毎日 95

ヴァレフ ■ 完全なる人間 117

ヴェージノフ ■ スペイン・コレラ 137

アンドレエフ ■ 襲いこみ——回想 165

ヴァーゾフ ■ ヨツツオじいさんが見ている 191

ミンコフ ■ ルナチーン！ ルナチーン！ ルナチーン！ 215

ヴォーレン ■ グルートカ 235

ハイトフ ■ デルヴィシヨフの胤たね 269

真木三三子 ■ ブルガリアの短編小説 289

装
幀

本
田

進

ヨ
フ
コ
フ

イ
ヴ
ァ
ン
・
ベ
リ
ン
の
あ
や
ま
ち

ヨルダン・ヨフコフ

Йордан Йорков (一八八〇—一九三七)。

早くから民族意識に目覺めていたジェラヴナで生まれ、一年間ロシアにいた。ソフィア大学法学部で学び、バルカン戦争には士官として参戦する。第一次大戦後は外務省に勤め、ブクレシュチに赴く。最初に発表したのは詩『運命』で、中編、長編、戯曲——『田舎ものたち』『ゴロモフの冒険』『百万長者』等——も書いているが、特に短編ではエリン・ペリンと並んで高く評価されている。繊細な神経と秀れた觀察力で自然現象や人間の内面の動きをとらえ、豊富な語彙を駆使して感動的に生き生きと綴り、洗練されたスタイルをつくっている。三編の戯曲は国民劇場で上演され好評を博した。

イヴァン・ペリンは、なんでも注意深く観察するのが好きだった。物事をこまかく見てよく知り、頭に十分刻みつけようとするのである。彼は、前兆を知らせたり特徴を指摘したりよく当たる予言をしたりする人の言うことに関心を持つほうであつたが、それでも、自分の目で確かめたうえでなければそれを信じようとはしなかった。

今彼は、またもや太い棒にもたれながら、釘づけにされたようになにかを見つめて立っている。前にも見たことのある白い牝狼が、すこし前にまた彼の家畜の群れの方へ走って行ったのである。飼いが嗅ぎつけて追っ払ったので、わるさはしなかったが、それでも、イヴァン・ペリンはなお立ち続けて、牝狼の後ろ姿を目で追っているのであつた。牝狼はもう遠くへ行っ



てしまった。戻って来る飼犬の姿が野原の真ん中に見える。あちこちの叢くさむらの間に、くるっと巻いた尻尾を立て、黒い背を見せている。長い毛は背中の中真ん中で二つに分かれ、駝鳥の羽のようだった。向こうの方には、もう最後の丘を越えた白い牝狼が見えた。牝狼は、危険は去ったのに、まだ疲れたような不揃いなギャロップを続けている。時々立ち止まり、後ろをふり返ってはまた走りだす。最後に、かなり長いこと立ち止まったあとまた駆けだしたが、こんどはもう、落ちて着いて整った歩調であった。と同時に、彼女は方向を西に変えて、野原の方へ向かった。イヴァン・ペリンは、いよいよ怪しいと思った。彼はまばたきもせずに牝狼を追い、なにかを考え込んでいた。涙で潤んでいるように見える目がきらりと光り、白い口髭の下で笑いが揺れた。

「何だ！ どういうことだ！ 山の中に隠れないで、こんな野原に隠れるなんて……」
 こう言って彼は頭をかしげた。

イヴァン・ペリンは、自分の発見に疑いをもたなかった。彼は西の方に目を移した。西の野原は滑らかに傾斜して、目のとどく限り遠くまで延びていた。そして地平線の果てには、石炭のように黒い空間が、内側に弓なりに曲がって見えた。森である。その森の上を青い霧がおおっている。霧は、夕日を受けてバラ色に変わっていった。樹々の梢は金色の空に黒く伸びていたが、その先っぽは燃えるように輝いていた。大きくて不気味なくらいの森だが、非常に遠い

ところにある。牝狼がそこからやって来てまた戻っていくとは考えられない。この野原のどこかに隠れ家をもっていると考えたほうがよさそうだ。麦の穂が人間の背ほどに伸びているから、その中になら、狼一匹どころか、数千匹でも隠れることができる。

イヴァン・ペリンは、いつものことながら、自分の慧眼^{けいがん}を誇りに思った。彼は羊の群れを追って歩きだした。笑いを浮かべ、丈高く繁った草をパツパツと踏みつけ、白い太い棒でなぎ倒し、大股に進んで行った。自分の羊の群れに追いつくと、群れの向きを変えさせ、棒にもたれ、あらためて牝狼を目で追うのであった。

入り日の弱い光の下で、向こうのものがすべてはっきりと見えた。青い野原が輝き、谷間からは黒い影が落ち、道を白く見せている。西の方では、畑の緑海が落日の炎を浴びて波打ち、輝いている。あなたに、牝狼が、まわりの緑の中で白い点となって見える。彼女は、依然として立ち止まりもせず、息をつくでもなく、あたりを見まわすでもなく、静かに規則正しい調子で走り続けていた。イヴァン・ペリンは、経験を積んだ達者な羊飼である。彼は、犬や狼が自分の行く目的地をもっている場合にだけ、そういう走りかたをするのだということをよく知っていた。そしてさらに彼は、牝狼の向かっている方向はいきあたりばったりのものではなく、きつと隠れ家のある方で、しかも近道をとっているのだと確信したのであった。

イヴァン・ペリンはまた、この牝狼が子持ちであるという確信ももった。

彼は何回かこの牝狼をすぐ近くで見ることができた。牝狼が犬に気づかれることなく、また、彼でさえも知らない間に、犬から六、七十歩離れたところに、まるで地面から湧いて出たかのように現われたのを目撃したことがあった。羊たちは片側に逃げてかたまり、犬たちは後方に立ち止まって、鉄砲玉のように牝狼に向かって行く構えをした。牝狼は立ち止まった時と同じ姿勢で前足の片方を上げ、目の前にきれいに開けた空間に立っていた。向きを変えるのが苦痛であるかのように、ためらう様子でじっと立っていた。走ることを忘れ、わが身を助けることをも忘れたかのようにであった。きゅっと緊まっている下顎が開き、赤い舌を垂らして息をはあはあさせ、目は半ば閉じたまましばたいたっている。これだ！ イヴァン・ペリンには忘れようとして忘れられないこの目、この姿！ 言葉では表現しようのない目と姿なのだ。そこには恐怖の色はなかった。自分のことを考えている表情はなかった。周囲のことにかまっている様子もなかった。その目には、ほかの恐怖、深く悲しいものが炎となって燃えていた。イヴァン・ペリンは、だれかに手で心臓を締めつけられているような感じがした。彼には、いっさいがわかったのだ。この目と、その中に見える苦悩の色が何を意味するのか、彼は知っているのだ。それは、すべての母親のもつ目であった。それが人間であろうと、動物であろうと。

だからこそ、彼女は、真昼間に襲いかかるような勇気が出せたのだ……。だからこそ、痩せて弱いながらも、大きな番犬が思わず飛び退ったほど猛々しく歯をむき出して、自分を護る

力が出せたのだ。

イヴァン・ペリンは、考えるのをやめにした。考えながらもずっと牝狼を観察していたのだが、この時、彼女がなにかするのが見えたからである。それが何を意味するかは、彼にはまだわからなかった。牝狼は立ち止まっていた。そして、猫がネズミをとらえようとする時のように、ゆっくりと足を踏みだし、用心深く忍び足をし、そしてふいに駆けだしたのであった。彼女の体は弧を描き、太い尻尾は宙で丸まった。彼女はこの跳びかたを何回か繰り返した。イヴァン・ペリンはにやりとした。牝狼はネズミとりをしている——狼としては最も意味ないパントである。しかし、ほかにしようがなかったのだ。仔羊もとらえることができなかったのだから、なにかを胃袋に入れて、飢えをわずかでも忘れる必要があった。なぜなら、隠れ家がすぐ近くにあったから。そこで、疲れ果て、体力を消耗しきって、彼女は草や腐った骨の中に横たわるかもしれない。なんの子供でもそうだが、むくげの仔狼も、なにもわからぬまま、無邪気に、乱暴に、がつがつと母親の瘦せた乳房に吸いつくだろう。母親のほうはまた、自分のことなど忘れて、耳をそばだて、同じく飢えの苦しみに燃える目を配ることだろう。それはもうイヴァン・ペリンは見えて知っていることだった。彼女は、だれかが危害を——自分にでなく子供に——加えはしないかと耳をそば立て、用心するのだ。

イヴァン・ペリンは溜息をついて、羊の群れに迫いつくために歩きだした。その瞬間、彼は

哀れみの情を感じ、心臓はあらゆる他者の苦痛に向かって開かれたのであった。牝狼はすでに畑の中に消えてしまっていた。しかし彼はなおもふり返り、その方角に目を向け続けていた。彼の考えはばらばらであつたし、途切れ途切れのものであつた。今牝狼のことを考えているかと思うと、今度は自分の仕事のことを考えている。しかし、すべてそれはこま切れるでほんやりしたものだった。はつきりしているのは、彼の胸に詰まっている痛みだけであつた。突然といつていくらいに早く夕闇が迫つて、ほの暗い西の空には、宵の明星が宝石のように輝きはじめた。冷たい風が吹き、薬草の匂いが流れ、コオロギが鳴きだした。夕闇の中を広く優しく鐘の音が響きわたる。イヴァン・ベリンは、すべての物に、なにか幽邃な、不変な、そして賢明な秩序を感じ、優しい気持ちで胸がいっぱいになるのだった。彼は目を上げて星を見た。しかし、今はそれに前兆や徴候を探し求めるのではなく、神の目を見ているような気になるのだった。思ひは再び牝狼に戻つた。『あいつだって生きものだ。そしてあいつは、神さまがおつくりになつたのだ。それにあいつは母親だし、子供たちを養わなきゃならない』と彼はまじめに、敬虔に考えた。

何週間かが過ぎて、イヴァン・ベリンはもはやあの牝狼を見ることもなく、忘れるともなく忘れていた。だれでもそんなものだが、彼の気持ちもまた簡単に変わつていった。今はもつとほかのことにかかずらつていた。彼は、露も湿り気もない乾燥した朝と暖かい朝とが交替し、

太陽がいつもより赤い色をして昇るのに空は灰色に曇っているのを見ていたのだ。この兆で、イヴァン・ペリンは旱天^{ひかり}を予感したのだ。そして実際のところ、すでに来る日も来る日も晴天つづきなのである。しかし、イヴァン・ペリンには世の中のならゆきがわかっていたから、意気沮喪することはなかった。

彼は言った。

「みんなよ、恐れることはねえわさ。神さまは、ご自分の仕事を知ってらっしゃる。今暑くしとけば、パンがよく焼けるってわけよ。とり入れの時期ももうじき終わる。麦の穂ももち上がってくるだろうし、切り株が腿の辺まで見えてくるだろう。そしたら、あいつらけものはたらふく喰って、喰いすぎでたおれちまうだろうさ」

イヴァン・ペリンは、自分のまわりに集まってくる若い羊飼いたちにそう話して聞かせた。彼らは昨日まで学校の生徒であったが、今はもう試験も終わり、肩には袋をかけ、バンドには笛をさし、わずかばかりの羊を追っているのだった。彼らに対して、イヴァン・ペリンはたいへんな権威をもって臨んだ。ほんとうの羊飼いに必要なすべてを把握している、知恵のある人間として臨んだ。それに、彼の容姿にもまた、人を惹きつけ好感を抱かせるものがあつた。背が高く、骨格のがっちりした男で、頭髮と口髭は雪のように白かったが、眉毛だけは全部黒かつた。それが彼の顔を二つに分け、それぞれをちがった感じにして見せるのであつた。目から

鼻にかけては、ややいかつくてしかつめらしい感じであるが、下の方にはこやかで陽気な顔だちに見えるのである。彼はまた、話すことが好きだった。ゆっくりではあるが、腹から出る快い潤いのあるバスだ。彼はいろいろな物語や実話を知っていて、聞き手が話に引き込まれていく間に、自分勝手な作り話を気づかれないように入れたりするのだった。良きにつけ悪しきにつけ、彼は他の人には真似のできないことをやってのけるのだった。羊飼いの少年たちが彼のまわりをとり囲んでも、彼のほうではだれて物憂く、なにもする気になれない時がある。そんな時彼は、最高におもしろいところで話を止めて言うのだった。

「ミランチョよ、行ってあのけものたちを連れて来い。まっすぐ畑の方に向かっているから」

とか、

「ストヤンチョ、ロバの背から水筒を取って来て、きれいな水をすこし持って来い。走って行って来いよ！ お前が戻って来るのを待って、それから羊飼いが女王になんと答えたか話の続きをしよう……」

とか。

少年たちは彼の言うことをよくきいた。だが時々、イヴァン・ベリンは、もうすこし手のことだことをした。大きな泉のまわりに、早魃かんばつの時でさえ、いつもいい草の生えているところが一カ所あった。そこをイヴァン・ベリンは自分用に確保したいと思い、若い連中を近づけない